

●今月の法語カレンダー●

当たり前と 思っていたことが
有り難いと 気づかされる

今月の言葉には深く頷かされました。私のすがたは自己中心、感謝もせず、無い物ねだりばかり、すべてを当たり前と思っていたのです。けれど仏法を聴く中で、今私があるのは「つながり合い支え合い生かされている」ことであつたと気づかされました。「人さんに 堪忍してもらつてばかり おりますがや」先月お寺の掲示板で紹介した妙好人の言葉です。お念仏をよるこんだ人からしか出てこない言葉でしょう。「有り難い」と自然に手が合わさる生活をしたいものです。

10月の行事

- 朝の日曜礼拝らいはい
毎週日曜朝7時
 - 仏教講座会
20日(金) 午後1時半
講師 尾寺俊水師(山口)
 - 写経会
20日(金) 午前11時
 - アソカ園ボランティヤ
10日(火)
- 10時半に武蔵野線・新八柱駅にお集まり下さい。

11月の行事

- お経サークル
28日(土) 午後3時
 - ヨーガ教室
11/25(水) 午後1時
 - 京都念仏奉仕団
4日(水) ~ 6日(金)
 - 雅楽教室 11月より
- 報恩講・門信徒会入門式
23日(木) 勤労感謝の日
○おみがき 4日(土)

活動報告

- 婦人の集い 築地報恩講参拝
 - お経サークル 18日(土)
 - ヨーガ 8/29日(水)
 - 写経会 お休み
 - 雅楽教室
22日(水) 午後6時
- ※先生が報恩講出勤の為、法要前日にレッスンとなりましたこと、ご理解下さい。興味のある方のご参加お待ちしております。



★お彼岸には多くのご門徒さんにご参拝いただき、法要を無事勤修することができました。

尚、京都参拝旅行は今回参加者が最低催行人数に至らず、残念ながら中止となりましたこと、ご報告とともにお詫び致します。

また、ビルマの子どもたちへの衣類の寄付は、多く

の方々のご協力をいただき、たくさん集まりました。ここに御礼申し上げます。



★エイズ募金に合計9816円のご寄付をいただきました。(彼岸法要後集計)

後日アーユスに届けさせていただきます。ご協力ありがとうございました。

★先月16日「東京教区総代研修会」(築地本願寺)には総代の大枝さん、阿部さん、熊谷さん、松川さんが、27日「千葉組総代・仏教壮年会研修会」(千葉・大願寺)には総代の大枝さん、門信徒役員の笹木さんがご参加下さいました。お疲れ様でございました。

内容のご報告は来月号で致します。

東京の有志僧侶で運営するホームページ「POSTEIOS（ポステイオス）」に若住職の法話が掲載されましたのでご紹介致します。

「お彼岸にお供えするのは ぼたもち？おはぎ？」

「暑さ寒さも彼岸まで」暑さも寒さもやわらぎ、一年で最も過ごしやすいのがお彼岸の頃です。お彼岸は春分の日、それから秋分の日をお中日として前後三日、合計七日間をさします。

彼岸のルーツはというと、「彼岸」とはもともと仏教用語。梵語の「波羅密多」（はらみつた）を漢訳した「到彼岸」のことをいいます。そして彼岸に対する言葉は「此岸」。此岸というのは、苦しみの世界、迷いの世界としての私たちが現実にも生きてこの世界をさします。その反対の彼岸は、楽しみの世界、よろこびの世界としての、私たちがまだ到達していないさとりの世界をいいます。そのさとりの世界に至る行を修するのに最もよい時期がこのお彼岸というわけです。

本来ならば仏教の修行は一年を通して行ってこそはじめて意味があるわけですが、一般の人たちは修行に専念するわけにはいきません。そこで、一年を通してもっとも気候のいい季節を春と秋に選び、せめてこの期間だけでも仏教の実践を行うことによって、少しでもさとりの岸である彼岸に近づこうと願ったのです。

これは日本独自の仏教行事で、他の仏教国にはないものです。最初に彼岸会が行われたのが聖徳太子の頃といわれ、平安時代初期に盛んになったようです。

それ以来、仏教にとって大切な行事として長く伝えられてきました。現在日本にある国の祝祭日の中、仏教行事に由来するものは、春秋のお彼岸の中日である、春分の日と秋分の日の日だけです。私たち日本人のこころになじんだ仏教的伝統といえるでしょう。

またお彼岸が七日というのは、「六波羅蜜」という仏教の実践項目の教によります。六波羅蜜とは布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧のこと。わかりやすくいえば“施しをするという実践”“いろいろな規律を守るとい実践”“じっと我慢をするという実践”“努力をするという実践”“心を集中させるという実践”“正しい智慧を得るとい実践”ということです。前後六日間に、六波羅蜜の一つずつを実践し、お中日の一日だけは、まとめて全部実践してみようということなのです。

一般にお彼岸には、ご先祖のお墓参りに出かけます。そしてお供え物の定番は、おはぎ。これらの風習は江戸時代頃から始まったようです。

なぜおはぎか？という、諸説あり。小豆が古来より邪気を払うとして先祖の供養と結びついたという説や、砂糖やお米が大変貴重だった時代に、先祖におはぎを供えて近所にお裾分けすることが大変な功德を積むことになったからという説。

またあんことお米、二つのものを「合わせる」から先祖と心と心を合わせるという意味で始まったという説もあります。けれどなぜお彼岸とおはぎが結びついたのかははっきりしないのが本当のところのようです。

ちなみに春彼岸には「ぼたもち」、秋彼岸では「おはぎ」と呼ばれますが、実は同じもの。春には牡丹、秋には萩と、花の時期によって呼び名が変わる風流な食べ物です。さらに花のイメージから、おはぎは粒あん、ぼたもちはこしあんで作るのだという話を聞いたことがあります。

お彼岸はお墓参りとすっかり馴染んだ行事ですが、これは「彼岸」を死後の世界、すなわち「あの世」と理解し、あの世に行ってしまったご先祖に対する供養の期間と誤解したことから生まれた風習と思われま。

しかし、私たちはご先祖からの“つながり”に感謝するところを大切にしてきたからこそ、お彼岸は日本に仏教行事として定着したともいえます。

感謝のところが忘れかけられかけている現代こそ、お供え物のおはぎ一つにどれほど先人方の思いが込められてきたのか思いを巡らせてみたいものです。

そろそろお彼岸を迎える時期となりました。今年には本来の意味を改めて問い、私自身が自分の日頃の生活を省みる「仏教週間」として、彼岸に至る道を聞かせていただき浄土を想うご縁と致しましょう。

